

四谷の千枚田だより



第 228 号

お陰で19年間発行し続けられました。

お天気任せ 何ともならん…

四谷の千枚田は、収穫期を迎えた八月二十五日くらいには落水し、九月初旬の稲刈りに備えているが、今年はその頃から雨降りが多い。特に千枚田は山裾からしみ出る湧き水(野水)が多く、雨が止んでから三〜四日は田んぼが泥濘でバインダ(小型稲刈機)が使えないし、稲架干(はざぼ)しもできない。

我が家を例に、落水を八月二十三日に行い、九月一日から稲刈りを行う段取りであったが、とんでもない表に示したように、八月二十九日から毎日が雨降り、おまけに高温(高湿度で、田んぼの稲穂が立った

まま芽生えている始末。ここで、無理して刈っても稲架で芽生えることは間違いない。

田んぼで行交う百姓は異口同音に「雨ばかりで困っちゃう：お天気には勝てんが、参っちゃうノン：また、台風がでておるし、一体、どうなっちゃうらうかノン：」と嘆きが、日々の挨拶である。

振り返って、田んぼの代掻きも四月下旬の雨がなかったら水不足、水騒動の状態であった。

受粉期も長雨、日照不足が続ぎ、登熟期、実りの秋の八月下旬も雨と日照不足で稲穂は捨実不良(しいな)が多く、粳(もみ)も小粒であり、

降雨日 (日/mm)

観測地点 作手観測所

日	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1	16	7	0	0	0	89
2	0.5	0.5	0	0	0	33
3	1.5	1	0	15.5	0	0.5
4	0.5	0.5	0	5.5	4	1.5
5	3.5	2.5	31	54	0	0.5
6	11	3.5	43	5.5	0.5	19
7	28	11	1	3	0	41
8	0.5	0.5	0	0.5	0	48
9	0	0	0	74	37	1.5
10	0	0	0	64	3.5	0.5
11	0	0	2.5	0	53	
12	0	0	0.5	43	82	
13	0	0	0.5	0	24	
14	5	2.5	18	29	6	
15	14	9	7	50	0	
16	0	0	0	45	6	
17	6	1.5	0	26	26	
18	0	4.5	4.5	1	23	
19	0	0	0	43	0	
20	0	0	0	0	0.5	
21	53	16	55	0	4	
22	5.5	11	5.5	24	0	
23	0	0	0.5	0	12	
24	9	2	1	0	0	
25	0	0	0	0	15	
26	38	11	4.5	131	0	
27	24	11	0	90	0	
28	0	0	0	1	0	
29	29	6.5	0	0	8.5	
30	0	0	0	0	12	
31		9		0	120	
計	244	109	174	689	435	233

■ 梅雨期

コラム

梅雨明け最速 取り消し

「四谷の千枚田だより」226号に「異例の早い梅雨明けと記録的な暑さ」と題して六月十四日に梅雨入り、六月二十七日に梅雨明け、たった十四日の梅雨で、異例な梅雨明け：と報じたが、九月一日、気象庁は関東甲信以南の七地区の梅雨明けは七月下旬と大幅に修正した。

当地方の梅雨明けは七月二十七日で、延べ四十三日の梅雨となり、平年並みであった。

研修受入れ

九月九日、名古屋大学農学教育研究センター(江原センター長)は国際協力機構からの依頼を受け、「アフリカ地域 稲作振興のための中核的農学研究者の育成」の技術研修を実施。研修に参加した農学研究者はマダガスカル二名、モザンビーク、ナイジェリア、セネガル、シエラレオネ、タンザニア、ウガンダ国の八名とTICA同時通訳など十一名が四谷の千枚田における農業技術を学んだ。

研修生は千枚田の農法「品種・用水の取り方・肥料・農薬は…」等々細部に渡っての質問攻め。アフリカ地域でも稲架かけがあると聞き、ビックリした。また、研修の成果を国で普及する…の言葉が嬉しかった。



稲刈り

九月八日、豊橋調理製菓専門学校の稲刈り(十五名)が行われた。

学生たちは五月に田植えした稲の生長速度にビックリ。天候不順で一週間延びた稲刈りを行うとともに、稲の生育調査では田んぼの面積や一株の籾の数などを測定。予想収穫量などを計算した。

また、東海農政局の参事官から、千枚田の貴重性や食料を取り巻く現在の状況などが説明された。

今年も案山子がやってきた

九月十一日、設楽町津具のチームTAKOさん(欽ちゃん香取慎吾の仮装大賞に連続出演・仮装大賞などを受賞)は今年で六年目になる新しいリアル案山子を設置。千枚田の広報大使として頑張っていた。



奥三河「美の体験ツアー」

奥三河観光協議会は八月二十四日、愛知大学の学生を対象にした「美の体験ツアー」を開いた。学生らは四谷の千枚田や豊根村の茶臼山高原で景観を楽しみ、東栄町では化粧品づくりに取り組んだ。



奥三河観光協議会は新城市と北設楽郡をエリアにした観光振興政策を考えている。十八年九月からは「okumikawawake」メザメ奥三河の名称で、農産加工品やコスメ体験などブランド展開を本格化させている。今回は若者向けに認知度を高めようと、愛知県新城設楽振興事務所の受託事業で初めて企画した。愛知大学からは地域政策学部の学生八人が参加した。四谷の千枚田では保存会会長が四

谷の千枚田の田んぼの維持や自然豊かな景観と生物多様性を伝える観察会や研修の開催、余剰米を利用した「千枚田五平餅」など、商品開発等々を説明した。

企業が地域に貢献

九月九日、横浜ゴム新城工場生物多様性保全チームは四谷の千枚田エリアの外来生物の抜根、駆除を実施して頂いた。今回の抜根成果は「アメリカセンダングサ」百八十二kgと「セイタカアワダチソウ」一、九kgであった。なお、この活動は千枚田内に造成したビオトープの管理と共に継続して行われる。

農耕儀礼「風まつり」

八月十六日、身平橋組(四谷)は海源寺で風まつりを行った。由緒は、この時期台風襲来が多く、農作物の被害を回避するため、五穀豊穡、家内安全、台風退散の願いを込め、無事平穏を託し、竹竿の先端に藁を束ね、紙垂れを差し、巨木の天空高く



奉る風習である。勿論「コロナ退散」も願った。

庚申さま

九月二十六日、我が家に「庚申さま」が回ってくる。かつては「かのえさる」の日に集落戸主が当家に集まり酒を呑みかわし、談笑。夜中の十二時を回ると、先達が巧妙遍照十方世界念仏衆正摂取不捨南無阿彌陀仏(三十二)を唱え、南無青面金剛明王と立ったり、座ったりして拝み、願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國で儀式は終わる。

庚申さまは諸説あるが、我が集落では家内安全、五穀豊穡を願ったものだが、令和元年に「面倒くさい」からと、回り番になってしまった。



病氣平癒や厄除けなどのご利益もあると考える日本独自の文化(集落コミュニケーション)も幾つか、消えつつある。さびしい。

行 令和四年九月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文 責 小山 舜二